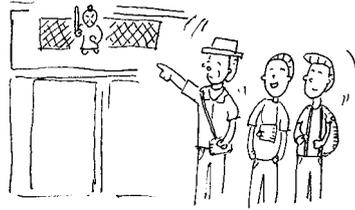
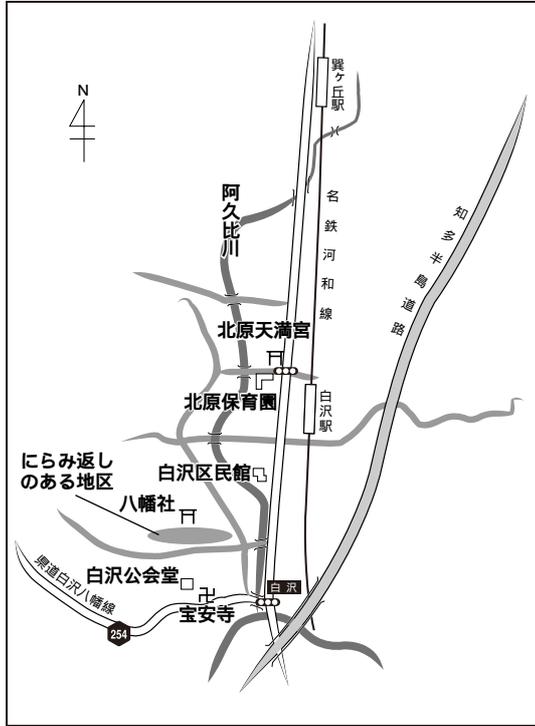


シリーズ

阿久比を歩く ①29



あぐいぶらり旅 建造物を見るへにらみ返し



民家のバルコニーに取り付けられた「にらみ返し」

白沢地区の民家のバルコニーに、瓦製の怖い顔をした「小さな人形」が取り付けられる。道路を隔てた向かいの民家の鬼瓦をにらむ。
人形の正体は、中国から伝わる、疫病神を除くという魔よけの神「鍾馗」。にらみを利かせることで、隣家の鬼瓦によって除かれた災いが、自分の家に降りかからないようにと行われてきた風習で、その「鍾馗」を「にらみ返し」と呼ぶ。

唐の玄宗は、科学試験に失敗し、自らの命を絶つた鍾馗を哀れみ、手厚く葬った。あるとき、玄宗が病に伏し、高熱に苦しむ悪夢を見る。虚耗という小鬼が現れ、楊貴妃の香袋と笛を盗もうとする。そこに鍾馗が現れ、帝に弔ってもらった恩返しにと、鬼退治をする。夢から覚めた玄宗の容態はすっかり良くなる。
邪気が建物の中に入って来ないようにと、屋根の棟の両端に取り付けられる「鬼瓦」。寺の多い京都の町家では、「鬼瓦」からの邪気を追い払うため、鬼をも退治する「鍾馗」が、屋根に飾られる。事典を調べると、鍾馗の人形を大屋根や小屋根の軒先に飾る風習は、近畿中部地方で見られるとのこと。
地元で詳しい八十一歳の男性が「にらみ返し」について話してくれた。

「鍾馗さんが飾られる家は少なくなっただけ、建て替え前の家にあつた鍾馗さんを引き続き飾ったと聞いたよ。向かいの瓦に「水」とあるでしょ。」
「我が「鬼嫁」を、しっかりと、にらみ返しているんだけど、僕の言うことをなかなか聞いてくれないのはどうしてかなあ」。私が愚痴を言うのと、「にらむ顔が、奥さんの目を見てないからじゃないですか」と友人に軽くかわされた。「にらみ返し」から目をそらした、空を仰いだ。青い夏空が広がっていた。



にらみ返しの向かいにある「鬼瓦」